

## 音 楽 科

# 音楽的な感受を支えに、 豊かに音楽表現し、聴き深める生徒の育成 ～音楽科における言語活動を通じた思考力・判断力・表現力の評価について～

附属函館中学校 嶋 田 歩

### I はじめに

新しい学習指導要領では、生きる力をはぐくむことを目指し、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うために、言語活動を充実することとしている。平成23年5月には文部科学省から「言語活動の充実に関する指導事例集」が示され、思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、それぞれの教科等において言語活動を充実する際の基本的な考え方や、言語の役割を踏まえた指導について解説されている。その中の、音楽科に関わる教科等の特質を踏まえた指導の充実及び留意事項<sup>1)</sup>では、以下の点が記述されている。

音楽科においては、創意工夫して音楽表現をする能力や味わって聴く能力を育成する観点から、音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、例えば、表現領域では、どのように音楽表現をしたいのかという思いや意図を言葉で表したり、鑑賞領域では、音楽を聴いて価値などを考え、批評したりする学習活動を充実する。

○音によるコミュニケーションの充実を図るため、音楽に対するイメージ、思い、意図などを相互に伝え合う活動を位置付けて、仲間とともに創意工夫して音楽を表現する喜びを味わうようにしたり、鑑賞した音楽に対する様々な感じ取り方があることに気付いて一人一人の音楽に対する意識を広げたりする。

○言葉と音楽との関係を重視する観点から、歌唱表現において、歌詞の内容や言葉の特徴を生かして歌ったり、日本語のもつ美しさを味わったりする学習活動を充実する。

○鑑賞の能力を育むために、音楽的な特徴などを理由として挙げながら音楽のよさや美しさなどについて述べる活動を位置付けて、主体的、創造的に味わって聴くことができるようにする。

これらを十分に踏まえた上で、言語活動は各教科等の目標の実現のための手立てであることに留意すること、学習評価との関わりにおいては、言語活動を通して育成する、思考力・判断力・表現力について、各教科の対応する観点において適切に評価することが求められている。これらのことを鑑み、音楽科における言語活動の充実、思考力・判断力・表現力と評価の在り方を念頭に入れた研究実践を進めることが重要であると考え。その上で、教科の目標の実現のために、「特定の課題に関する調査（音楽）についての報告書」（平成22年7月）の「音楽科の指導を改善充実するために重要なこと」として報告されている、生徒が楽しく音楽にかかわり、音楽活動の喜びを得ることができるよう指導を工夫すること、音楽の表現と鑑賞の学習を充実するために、言語活動を適切に取り入れるよう指導を工夫すること、音楽を形づくっている要素を手掛かりとしながら思考・判断し、音楽を豊かに表現したり鑑賞を深めたりする指導の充実をめざしていきたい。

## II 研究の経過

### 1. 本科の研究主題について

本科では、平成17年度から平成22年度まで、主題「自分なりの音楽を追究し、豊かに表現する生徒の育成」の下、6年間継続研究に取り組み、生徒が「自分なりの音楽観（価値観）」を追究していく礎となる、知覚・感受力、表現力、鑑賞力、文化理解力、人間関係形成力等の育成をめざし、実践にあたってきた。

主な研究内容（平成20年度、平成21年度は研究副主題）は次の通りである。なお、平成21年度と平成22年度は、国立教育政策研究所（以下“N I E R”）教育課程研究指定を受けての取組である。

主な研究内容…平成23年度は研究主題

- 平成17年度「自分なりの音楽をはぐくむ3つのアプローチ」
- 平成18年度「自分なりの音楽と学習活動とのかかわりの明確化」
- 平成19年度「自己の思いや意図をもって表現する力と自己の価値観をもって批評する力の育成」
- 平成20年度「音楽科における言語活動の工夫」
- 平成21年度「我が国の伝統的な歌唱及び鑑賞に関する学習指導の工夫」（N I E R研究指定1年次）
- 平成22年度「我が国の伝統的な歌唱及び鑑賞に関する学習指導の工夫」（N I E R研究指定2年次）
- 平成23年度「音楽的な感受を支えに、豊かに音楽表現し、聴き深める生徒の育成」

本科ではこれまで、「自分なりの音楽観（音楽に対する価値観）」を育てる観点から、1単位時間といった短いスパンはもとより、題材等を通して自分と音楽とのかかわりについて意識し、もっと長いスパン、すなわち生涯にわたって音楽を愛好していくための音楽と自分の接点を見つけることのできる生徒の育成を目指してきた。目指す生徒像は、自分の感情と重なり合った「自分なりの音楽観（音楽に対する価値観）」を追究していく生徒であり、様々な音楽活動をしていく根幹となる基礎・基本となる諸能力について、自分に何が身に付いていて、何が身に付いていないのかを適切に自己評価することのできる生徒である。これらを追究していくことは、包括的に自己の感情をとらえることにもつながり、音楽科の教科目標にある豊かな情操を養うことに寄与していけるものと考えてきた。

また、併せて「豊かに表現する」生徒の育成についても目指してきた。この「表現する」生徒とは、音楽表現のみならず、鑑賞活動においても感受した自己の内にあるものを、自分の感情の変化を踏まえながら、音楽に関する言葉などを用いて、音楽に対して、自分なりの根拠をもって批評することのできるように、何らかの形（発話、批評文等）で外部に表出、表現させることのできる生徒という意味である。

さらに、「知覚・感受する」、「思考・判断する」、「表現する」といった一連の学習過程はもとより、各題材を通して習得された知識や技能などを個々に積み重ねていくだけではなく、それらを相互に関連させ活用することによって、「自分なりの音楽観」は培われていくものと考えてきた。新しい学習指導要領では、新たに、教科目標の中に「音楽文化についての理解を深め」ることが規定された。これは、表現及び鑑賞の幅広い活動を通して学習が行われることを大前提としており、「自己の思いや意図をもって」音楽表現するといった、音によるコミュニケーションを基盤とする音楽活動、すなわち音楽文化そのものを対象とした学習を通して、それらの理解を深めていくことが求められているのである。

このように、知覚・感受したことを基に、自分なりの思いや意図をもって音楽表現したり、味わって聴き深める力を育成することや、生涯にわたって音楽文化に親しむ態度を育成したりしていくことは、音楽教育の根幹を為す大切なことと考える。ゆえに、それらは、後述する平成23年度からの研究主題「音楽的な感受を支えに、豊かに音楽表現し、聴き深める生徒の育成」においても継続している。

## 2. 昨年度の研究について

昨年度は、平成21・22年度にN I E Rの研究指定を受けて取り組んだ「我が国の伝統的な歌唱及び鑑賞」や、平成20年度から取り組んできた「音楽科における言語活動の在り方」についての研究成果や課題を踏まえ、これからの中学校音楽科の学習指導と新しい学習評価のポイントに関する実践・研究を推進すべく、研究主題を「音楽的な感受を支えに、豊かに音楽表現し、聴き深める生徒の育成」とし、主に「思考・判断・表現」及び「関心・意欲・態度」に関する評価方法の開発等に取り組んだ。

具体的には、新しい学習評価のポイントとして、「A表現」領域の学習と「B鑑賞」領域の学習を支える「音楽的な感受」(〔共通事項〕の事項ア…音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取る)を窓口に、感性を高め、思考・判断し、表現する一連の過程における学習指導とその評価を重視し、身に付けさせようとしている資質や能力を明確にした上で、評価規準の見直しや評価方法等の工夫に取り組んだ。これらの取組によって、新しい学習指導要領に定められた音楽科の目標等の実現状況をより適切に把握することができるとともに、音楽科における「思考・判断・表現」に係る観点として位置付けられている「B鑑賞」領域の「鑑賞の能力」や、「A表現」領域の「音楽表現の創意工夫」に係る力と「音楽表現の技能」に係る力についても相互にかかわらせながら伸ばすことができるものと考えた。また、これら三つの観点と密接に結び付いている「音楽への関心・意欲・態度」については、学習指導とその評価に係る課題を常に捉えながら、改善を図り、歌唱、器楽、創作で豊かに音楽表現する、或いは、自分なりに批評をし、よさや美しさなどを味わって聴き深めるといった学習を繰り返していくことで、主体的に音楽表現や鑑賞の学習に取り組もうとする態度の育成につながると考え、実践にあたった。

## Ⅲ 本年度の研究

本科では、昨年度設定した研究主題「音楽的な感受を支えに、豊かに音楽表現し、聴き深める生徒の育成」を本年度も継続し、副主題については本校の研究主題「言語活動を通じた思考力・判断力・表現力の評価についての組織的な取組」を受け、「音楽科における言語活動を通じた思考力・判断力・表現力の評価について」とした。平成20年度からこれまで取り組んできた「音楽科における言語活動の在り方」についての研究成果や課題を踏まえ、昨年度からの継続として言語活動の重点項目に対する評価方法についても開発を進めている。また、新しい学習指導要領で示されている、これからの中学校音楽科の学習指導と新しい学習評価のポイントに関する実践・研究を推進すべく、本科における言語活動を通じた思考力・判断力・表現力に関する評価方法の工夫と開発について、継続して取り組んでいるところである。

具体的には、新しい学習評価のポイントとして、「A表現」領域の学習と「B鑑賞」領域の学習を支える《音楽的な感受》(〔共通事項〕の事項ア…音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取る)を窓口に、感性を高め、思考・判断し、表現する一連の過程における学習指導とその評価を重視し、身に付けさせようとしている資質や能力を明確にした上で、評価規準の見直しや言語活動を通じた思考力・判断力・表現力の評価方法の工夫・開発に取り組んでいる。

このことによって、新しい学習指導要領に定められた音楽科の目標等の実現状況をより適切に把握することができるとともに、音楽科における「思考力・判断力・表現力」に係る観点として位置付けられている「B鑑賞」領域の「鑑賞の能力」や、「A表現」領域の「音楽表現の創意工夫」に係る力と「音楽表現の技能」に係る力についても相互にかかわらせながら伸ばすことができるものと考えられる。

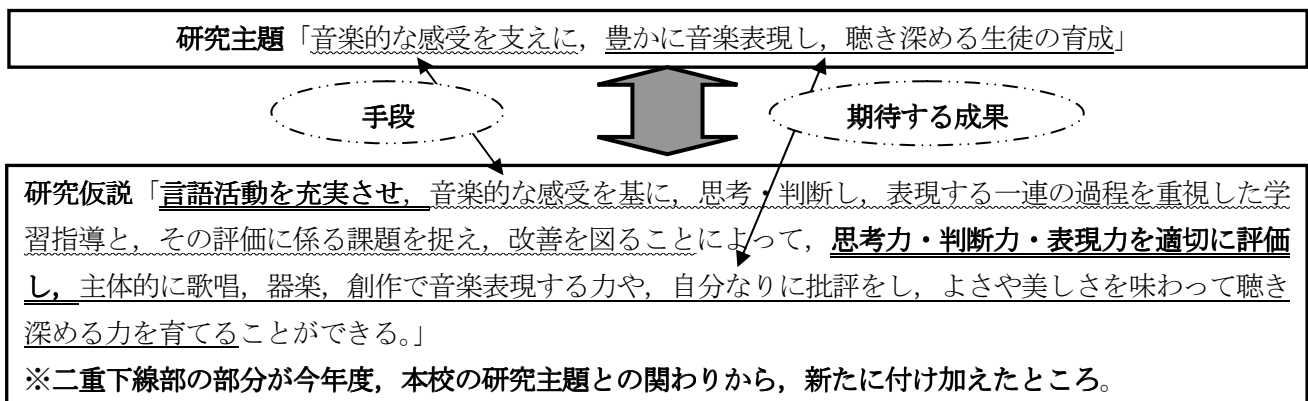
また、これら三つの観点と密接に結び付いている「音楽への関心・意欲・態度」についても、学習指導とその評価に係る課題を捉え、改善を図り、歌唱、器楽、創作で豊かに音楽表現する、自分なりに批評をし、よ

さや美しさなどを味わって聴き深めるといった意味ある学習にしていくことで、主体的に音楽表現や鑑賞の学習に取り組もうとする態度を育てていきたい。

#### IV 教科研究仮説

##### 1. 研究仮説について

本年度の研究主題は「音楽的な感受を支えに、豊かに音楽表現し、聴き深める生徒の育成」、副主題は、「音楽科における言語活動を通じた思考力・判断力・表現力の評価について」である。これと本校の研究仮説である「各教科における言語活動を充実させ、指導と評価の一体化を図ることによって、思考力・判断力・表現力を適切に評価し、一層育成していくことができる。」を基に、Ⅲに示した研究の方向性を踏まえ、研究仮説を「言語活動を充実させ、音楽的な感受を基に、思考・判断し、表現する一連の過程を重視した学習指導と、その評価に係る課題を捉え、改善を図ることによって、思考力・判断力・表現力を適切に評価し、主体的に歌唱、器楽、創作で音楽表現する力や、自分なりに批評をし、よさや美しさを味わって聴き深める力を育てることができる。」とした。また、副主題については本年度、主として、言語活動を充実させること、音楽的な感受を基に、思考・判断し、表現する一連の過程を重視した学習指導を展開することで、思考力・判断力・表現力の評価に係る課題を捉え、その評価方法の工夫改善に取り組み、一層育てていくことを意味している。研究主題と研究仮説との関連について、次に図示する。



##### 2. 研究仮説に基づく実践例

###### (1) 学習状況を把握するための評価と学習指導の改善につながる評価

本校では、総論でも述べられているように、思考力・判断力・表現力の評価を、「学習状況を把握するための評価」と「学習指導の改善につながる評価」の2つの視点からとらえている。「学習状況を把握するための評価」（記録に残す評価）は、「思考力・判断力・表現力」に係る本科の観点である「音楽表現の創意工夫」「音楽表現の技能」と「鑑賞の能力」に生かす総括資料となるものであり、本科では、主に学習過程が見えるワークシート（表現、鑑賞）、批評文（鑑賞）、演奏（歌唱・器楽）、作品（創作）などによって記録を残している。もう一方は、学習指導の改善につながる評価（指導に生かす評価）であり、生徒の状況に応じた適切な指導にしていくために、生徒の発言や演奏に対しての即時的なフィードバック（アドバイス）、観察や発表、机間指導等を主な評価方法としている。

###### (2) 学習状況を把握するための評価（記録に残す評価）

ア 本科における効果的な言語活動の精選

本校では、平成20年度から言語に関する能力の研究を組織的に取り組んでいる。それらを踏まえながら、本年度は従前分類してきた言語活動の項目を、7項目から【感受・表現】(体験から感じ取ったことを表現する)、【記録・伝達】(事実を正確に理解し、記録・伝達する)、【解釈・説明】(概念・法則・意図等を解釈し、説明したり、活用したりする)、【評価・論述】(情報を分析・評価し、論述する)、【構想・実践】(課題について、構想を立て実践し、評価・改善する)、【討論・協同】(互いの考えを伝え合い、自らの考えを発展させる)の6項目に変更して、言語活動の充実を図っている。更に、新しい学習指導要領の中で、思考力・判断力・表現力を育む上で教科固有の学習を生かして言語活動に取り組む必要がある重点項目を各教科で精選した。

本科における重点項目(効果的な言語活動)については、以下の点に留意して精選した。

●平成20年1月の中央審議会の答申において改善の基本方針に、音や音楽を知覚し、そのよさや特質を感じ取り、思考・判断する力の育成を一層重視することが示されている。

●中学校学習指導要領の音楽科の主な改訂の要点として、

〈鑑賞領域では〉

音楽科の学習の特質に即して言葉の活用を図る観点から、「言葉で説明する」、「根拠をもって批評する」などして音楽のよさや美しさを味わうこととし、音楽の構造などを根拠として述べつつ、感じ取ったことや考えたことなどを、言葉を用いて表す主体的な活動を重視しており、音楽に関する言葉などを用いながら、音楽に対して、生徒が、根拠をもって自分なりに批評することができるような力の育成が示されている。

〈表現領域では〉

合唱や合奏など全員で一つの音楽をつくっていく体験を通して、表現したいイメージを伝え合ったり、協同する喜びを感じたりする指導を重視することが示されている。

●〔共通事項〕を窓口に、音や音楽を知覚し、そのよさや特質を感じ取り(音楽的な感受を基に)、思考・判断することは、音楽表現を色々試すことや思いや意図を持つことであり、表現することは、思考・判断していることを言葉など(発言、記述、音、楽譜、体の動き、絵なども含め)で表すことと考えられる。この音楽的な感受を基に、思考・判断し、表現する一連の学習過程を踏まえた上で、音楽科では、効果的な言語活動として、【感受・表現】、【解釈・説明】、【構想・実践】、【討論・協同】の項目を中心とした実践に取り組んでいる。


また、組織的な取組の1つとして、各教科が学習指導要領から精選した、協議の柱となる言語活動の重点項目をもとにグルーピングをした。本科は、【感受・表現】、【討論・協同】を柱とした美術科・外国語科と合同でグループ協議や授業研究を重ね、評価方法の開発の新しい視点を模索している。

## イ 評価方法の工夫改善

評価方法の工夫改善にあたっては、昨年度からの継続実践として、これまでの評価方法等を振り返るとともに、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」(中学校音楽)の「教科の学習活動の特質、評価の観点や評価規準、評価の場面や生徒の発達段階に応じて、様々な評価方法の中から、その場面における生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択していくことが必要である。上記のような評価方法に加えて、生徒による自己評価や生徒同士の相互評価を工夫することも考えられる。」の部分と「ワークシート等への記述内容は、「知識・理解」の評価だけでなく、「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」の評価にも活用することが可能であり、生徒の資質や能力を多面的に把握できるように工夫し、活用することが考えられる。」の部分<sup>2)</sup>に特に留意し実践にあたってきた。さらに、実際の授業等の課題を捉え、その改善の方策を練るにあたって、2つの視点(①指導

のねらいや手立てを明確にするといった視点、②音楽的な感受を基に、思考・判断し、表現する一連の学習過程を位置付けるといった視点)を踏まえ、生徒の変容等の分析とともに実践・検証している。

具体的な取組としては、視点①については、「音楽的な感受」〔[共通事項]の事項ア)を基軸とした指導内容の焦点化と育成する学力を明確にした指導計画・評価計画を作成するとともに、生徒に確実に学習する内容を明らかにする方策を練ること、視点②については、各授業の中で、感性を働かせながら音楽の雰囲気等を感じ取る場面を設定すること、感性を働かせて感じ取ったことを基に、思いや意図をもって音楽表現を求める場面を設定することや、自分なりの音楽のよさや美しさといった価値を判断しながら味わって聴くといった場面を設定することで、学習過程における生徒一人一人の形成的な評価を大切にしたい。また、表現・鑑賞それぞれの領域の学習における学習過程が見えるワークシートと、今年度はさらに関連して、期末テストにおいて「思考力・判断力・表現力」を問う問題の作成等にも取り組んでいる。以下にワークシート等の例を示す。



情景を思い浮かべて 『花』 武島 羽衣作詞、滝 廉太郎作曲

3年組 番 氏名

◎学習のポイント  
「花」の歌詞が表す春の美しい情景と曲想の効果的な結びつきを生かした曲にふさわしい表現をめざして、自分なりの思いや意図をもって歌おう!!

●あなたは、この曲を歌唱表現するにあたって、①どのような音楽表現の工夫をして、②自分なりの思いや意図をもって歌いますか。できるだけ具体的に（音楽に関する言葉を用いて、歌詞のどの部分をどのように歌いたいか）書きましょう。

この部分に、言語活動【感受・表現】として、自分なりの思いや意図、音楽表現の工夫について、思考・判断し、音楽に関する言葉を用いて、具体的にワークシートに表現する。（グループ内で更に交流する。）

にしきおりなす ちょうていに  
くればのぼる おぼろづき  
げにいっこくも せんきんの

演奏発表時には、始めに、工夫点等を他に知らせない状態で、発表を聴き合う。その後、どのような工夫点等が音楽表現できていたかを、言語活動【討論・協同】として、相互評価（全体で交流）させる。

期末テストでは、網掛けの部分について、総合的な評価として、思考力・判断力・表現力を見取る問題を作成し、実施した。問題については次頁を参照のこと。

ながめをなには たとうべき

教師は、相互評価の場面で、随時、評価のポイントをアドバイスし、正しい評価活動が行えるようにした。

ワークシートを効果的に活用し、感じ取ったことや表現したい思いなどを相互に伝え合う活動を適切に入れていくことが、豊かに音楽表現することに結びついていくと考えた。

**II 「花」の曲にふさわしい音楽表現の工夫について次の問いに答えなさい。**

次の楽譜に示されている「ながめをなにに たとうべき」の部分には、強弱に関する記号やその他の記号が書かれていない。楽譜の正しい位置に、強弱に関する記号やその他の記号を記入しなさい。(伴奏部分には記入しなくてよい。)

また、この部分を歌うときに、あなたは①どのような思いや意図をもって(どのような気持ちやどのような考え方で)、②どのように音楽表現を工夫しながら歌いますか。それぞれ、文章で説明しなさい。

※①については、思いや意図(気持ちや考え方)の理由についても答えること。

※②については、強弱記号やその他の記号、音符などの音楽に関する言葉を用いて答えなさい。

**【楽譜】**



**<設問の意図>**

観点「音楽表現の創意工夫」について、【楽譜】への強弱記号等の記入と、どのように歌うかについての思いや意図をもつこと、その理由をもとに、どのように音楽表現を工夫して歌うかを音楽に関する言葉を用いて説明することの記述内容を基に、思考力・判断力・表現力を問うこととした。

	(思いや意図)
①	(理由)
②	

思考力・判断力・表現力を問う記述式の問題を期末テストで実施した結果、前頁のワークシートの見取り時に、音楽表現の創意工夫の観点について、自分なりの思いや意図について表現(記入)されている「十分満足な状況」と見取った生徒であっても、期末テストでは、【楽譜】への記号の記入が正確にできていない、思いや意図、また、その理由について明確に記述ができていないという状況がみられた。このことは、従来穴埋め等がほとんどだった本科の期末テストの問題が、生徒の思考力・判断力・表現力を測ることに適していなかったことや、具体的に記述させることが思考力・判断力・表現力を測ることに有効であり、音楽表現の創意工夫の観点を、ワークシート・期末テスト等の複数の方法で測ることにより、評価の信頼性や客観性を高めることに一定の成果が得られるものと考えられる。

**音楽科における「思考力・判断力・表現力」を問う期末テストの問題例**

(3) 学習指導の改善につながる評価(指導に生かす評価)

ア 学習指導に生きる評価計画の作成

昨年度からの継続研究として、評価方法を盛り込んだ年間指導計画の作成に取り組んできた。本年度は、言語活動系統表について、題材の「言語活動系統表との関連」の見直しを行った。また、思考力・判断力・表現力の育成を意識した言語活動の重点項目を□枠で囲むようにした。また、指導と評価の一体化が図れるように、指導目標と評価規準がしっかり対応した形になるように計画全体の見直しを図り、音楽的な感受を基に、思考・判断し、表現する一連の過程を重視した学習指導と、その評価に係る課題を捉え、改善を図るために、指導と評価の系統化を図った。次頁に示したのは、第2学年の題材名「絵画と音楽のかかわり」の評価計画を盛り込んだ年間指導計画の例である。

イ 校内の評価システムについて

本校では、学期ごとに、教師による授業評価、生徒による授業評価を行っている。今年度も1学期末

＜題材名＞絵画と音楽のかかわり【第2学年】									
◎題材の目標 「展覧会の絵」の鑑賞活動を通して、絵画と音楽のつながりに関心をもち、音楽の特徴を絵画からの印象とともに知覚・感受し、原曲（ピアノ）やオーケストラ編曲などによる多様な響きや音楽表現のよさや美しさを味わう。									
月	題材	指導目標	主な学習活動	【言語活動系統表】との関連					
4-5 (6)	絵画と音楽のかかわり	①絵画の印象から曲の雰囲気や想像することに関心をもち、各楽曲の特徴や印象の違いに気を付けて鑑賞する学習に主体的に取り組ませる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「展覧会の絵」（ラヴェル編）から「卵の殻をつけたひななどのパレエ」を聴き、知覚・感受した曲の雰囲気から絵画を選択する。</li> <li>・教科書に掲載されているガルトマンの絵画（原画）についての印象から、それぞれの曲の雰囲気や印象の違いに気を付けて鑑賞する。</li> </ul>	2	【感受・表現】 【解釈・説明】				
		②「展覧会の絵」のピアノ原曲、オーケストラ編曲等を聴き比べさせ、多様な音楽表現の豊かさや美しさを味わわせる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「展覧会の絵」のオーケストラ編曲（ラヴェル編）の冒頭の「プロムナード〜グノーム」と他のプロムナードの聴き比べをし、それぞれの音楽の特徴について、解釈し、他者に説明する。</li> <li>・「展覧会の絵」の中から、いくつかの楽曲について、ピアノ原曲、オーケストラ編曲（ストコフスキ編）を聴き比べさせ、音楽表現を知覚する。</li> </ul>	1					
		③「展覧会の絵」の中から、「卵の殻をつけたひななどのパレエ」「プロムナード〜グノーム」について、シンセサイザー編曲（冨田編）を聴く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの学習を基に、まとめとして、オーケストラ編曲（ラヴェル編）の「展覧会の絵」の楽曲をいくつか聴き、自分なりの価値を見だし、他者に説明する。</li> </ul>	2					
			④「展覧会の絵」のピアノ原曲、オーケストラ編曲等を聴き比べさせ、多様な音楽表現の豊かさや美しさを味わわせる。	⑤「展覧会の絵」のピアノ原曲、オーケストラ編曲等を聴き比べさせ、多様な音楽表現の豊かさや美しさを味わわせる。	⑥「展覧会の絵」のピアノ原曲、オーケストラ編曲等を聴き比べさせ、多様な音楽表現の豊かさや美しさを味わわせる。	⑦「展覧会の絵」のピアノ原曲、オーケストラ編曲等を聴き比べさせ、多様な音楽表現の豊かさや美しさを味わわせる。	⑧「展覧会の絵」のピアノ原曲、オーケストラ編曲等を聴き比べさせ、多様な音楽表現の豊かさや美しさを味わわせる。	⑨「展覧会の絵」のピアノ原曲、オーケストラ編曲等を聴き比べさせ、多様な音楽表現の豊かさや美しさを味わわせる。	⑩「展覧会の絵」のピアノ原曲、オーケストラ編曲等を聴き比べさせ、多様な音楽表現の豊かさや美しさを味わわせる。

【言語活動系統表】との関連…本題材では、学習過程の中で、【感受・表現】、【解釈・説明】の言語活動を取り入れている。

本題材の思考力・判断力・表現力に係る観点「鑑賞の能力」の評価は、「展覧会の絵」のオーケストラ編曲・ピアノ原曲・シンセサイザー編曲・プロムナードの聴き比べを通して、知覚・感受したことを基に、音楽に関する言葉を用いて、自分なりの根拠をもって、多様な音楽表現の豊かさや美しさについてワークシートに記述させ、主にその内容から見取る。

評価計画を盛り込んだ年間指導計画の例

に、実施した。本年度は、思考力・判断力・表現力の育成のための授業評価を、Plan（企画）、Do（展開）、Check（把握）、Action（改善）の項目による授業評価表を基に行っている。振り返ってみると、Plan（企画）にあたる授業構想や Do（展開）にあたる授業環境、授業構成、授業スキルについてはおおむね意識した取組ができていると自己評価しているが、Check（把握）にあたる、学習前の生徒の言語に関する能力の把握や学習後の題材全体を通した生徒の変容を明らかにしているかの項目について、また、Action（改善）の指導の効果を他の教師や生徒の評価から客観的にとらえているかの項目についても、不十分と自己評価した。今後、生徒の授業評価の結果とも合わせ、生徒の実態に合わせて迅速に修正を図っていきたい。

V 仮説の検証

本科の研究仮説は、「言語活動を充実させ、音楽的な感受を基に、思考・判断し、表現する一連の過程を重視した学習指導と、その評価に係る課題を捉え、改善を図ることによって、思考力・判断力・表現力を適切に評価し、主体的に歌唱、器楽、創作で音楽表現する力や、自分なりに批評をし、よさや美しさを味わって聴き深める力を育てることができる。」であった。この研究仮説を本校研究の3つの重点にそって検証する。

1. 教科間における言語活動のつながりを意識した指導と評価

本科では、新しい学習指導要領に示された言語活動に着目し、重点的に取り組むべき言語活動を精選し、



【感受・表現】、【解釈・説明】、【構想・実践】、【討論・協同】の項目を中心とした実践に取り組んできた。また、組織的な取組の一つとして、協議の柱となる言語活動の項目【感受・表現】、【討論・協同】を柱とした美術科・外国語科と合同でグループ協議や授業研究を重ねてきた。結果、言語活動の充実によって、思考力・判断力・表現力の育成が求められる中で、本科が分担できる言語活動について、より教科固有の、すなわち、音楽的な感受を基に、思考・判断し、表現する一連の学習過程の中に生かして取り組むことによって効果的に指導と評価を行うことができた。

## 2. 各教科の言語活動を通して、思考力・判断力・表現力を評価する評価方法の工夫・開発及び実践

全体での研究協議や他教科とのグループ協議、まとめられた各教科の評価方法を〔長期・短期〕〔実技・筆記〕の2軸で分類し一覧にした俯瞰図（総論参照）によって、他教科の評価方法の取組を知ることができた。また、それによって、本科の思考力・判断力・表現力に関わる評価方法の取組の薄い部分を明らかにすることができた。具体的には、本科では、言語活動を通じた思考力・判断力・表現力を評価する評価方法として、ワークシートの記述内容の見取りによるところが多いが、先進的な取組を進めている英語科の映像による活動の観察や数学科の自分の考えを発表した場面の映像や音声の記録、国語科の話し合い活動などの映像や音声の記録等の評価方法が、今後、本科の評価活動においても効果的で効率的な評価として開発可能な部分であることがわかった。次年度以降、タブレット等を活用した評価方法についても研究の視野に入れていければと考えている。また、思考力・判断力・表現力を評価する評価方法の工夫・開発については、前述した実践事例の思考力・判断力・表現力に係る観点「音楽表現の創意工夫」についてのワークシートと期末テストの設問についての相関を、データを基に分析する。期末テストにおける、観点「音楽表現の創意工夫」についての設問に対する正答率は、3年生が全体の46%、2年生が全体の42%であった。2つの学年とも、ほぼ同内容の設問にしたことから、単純に2つの学年の数字を比較すると、2年生よりも3年生の方が、思考力・判断力・表現力に資する評価数値が高いことがわかる。一方、期末テスト前に実施したワークシートの記述内容による、観点「音楽表現の創意工夫」の見取りが、3年生の場合、おおむね満足な状況が44%、十分満足な状況が31%であったことから、本科では期末テストの正答率について、おおむね満足、十分満足と見取った生徒数とほぼ同じの7割程度を当初予想していたが、実際の正答率は予想よりもかなり低い結果であった。このことから、より適切に思考力・判断力・表現力を評価するためには、1つの評価方法だけではなく、関連させた複数の評価方法を用いて見取ることが、評価の妥当性や信頼性を高めることにつながるということがわかった。

## 3. 指導と評価の一体化を図る年間指導計画・評価計画の改善

昨年度からの取組である指導と評価の一体化を図る年間指導計画の作成については、本年度、学校全体として思考力・判断力・表現力を育むための言語活動の焦点化と、指導と評価の系統化を取り入れ改善を図ってきた。本科でも、当初作成したものを基に実践しながら、題材ごとに、振り返り修正しているところであるが、まだ十分なものとは言えず、今後も継続して改善を図っていきたいと考えている。

## VI 成果と課題

成果としては、今年度、仮説の冒頭に新たに付け加えた「言語活動を充実させ」の部分について、前述してきたように思考力・判断力・表現力を育成する視点から、学習の展開を段階的に捉え、音楽的な感受を基に、思考・判断し、表現するといった一連の学習過程の中で、言語活動を意図的・計画的に位置付けること

ができたこと。また、指導と評価の一体化を図る年間指導計画・評価計画を改善していく中で、新しい学習指導要領の各領域の指導事項に照らし合わせ、どの場面でどのような手段をとるのかを整理し、明確にすることによって、より言語活動を通した具体的な学習指導や評価方法を構想することができたことがあげられる。一方、課題としては、仮説の中ほどに付け加えた、「思考力・判断力・表現力を適切に評価し」の部分について、思考力・判断力・表現力の評価の妥当性・信頼性を高めること、評価の回数や内容を精選すること、評価規準に照らした生徒一人一人の形成的な評価や工夫ある指導を十分行うこと、学習指導の展開の中に焦点を絞った評価を位置付けること、長期的な視点でそれらを見取る評価方法の工夫・開発等についてまだ十分とは言えず、研究実践を継続し、検証していくべき課題がいくつも残った。

## Ⅶ おわりに

本年度は、主として、思考力・判断力・表現力の評価を基軸に、言語活動の充実をさせること、音楽的な感受を基に、思考・判断し、表現する一連の過程を重視した学習指導を展開することで、思考力・判断力・表現力の評価に係る課題を捉え、評価方法の工夫改善に取り組むことで、生徒の思考力・判断力・表現力を



授業の様子

一層育てていくことをめざして実践・研究を行ってきた。思考力・判断力・表現力の評価については、妥当性と信頼性を高めることが求められており、前述した成果と課題を踏まえ、これからも日々の実践の中で、言語活動の充実や学習過程において適切な思考力・判断力・表現力の評価によって、生徒が音楽的な感受を支えに、豊かに音楽表現したり、聴き深めたりしていけるように、学習指導とその評価に係る課題を捉え、改善を図る等、研鑽に努めていきたい。

(文責 嶋田 歩)

### <引用文献>

- 1) 言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～（中学校版）文部科学省（平成 23 年 5 月）13 頁
- 2) 評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校音楽）国立教育政策研究所教育課程研究センター（平成 23 年 11 月）11 頁

### <参考文献>

- ・特定の課題に関する調査（音楽）についての報告書 国立教育政策研究所教育課程研究センター（平成 22 年 7 月）233 頁～239 頁